医師研修会、医師の再教育・養成制度などを挙げて近代医学への連続性を実証した。遠藤論文は近代的博物学の受容や舎密学・写真術の研究などを手掛けた飯沼慾斎の蘭学塾の成立と展開を、二十名まで拾い挙げた門人の動向を探りながら検討された。親戚縁者の比率が高く、在村において蘭学の展開を実証し、末中哲夫氏の提唱する「実学と同族性」へと導いた。下山論文は宇田川・箕作両家に代表される有能な人材を輩出するに至った地域の特性、津山藩医の蘭学浸透度、在村医の活動状況を実証された。菊池論文は下野関係者三十四名（うち二十二名が在村医）を摘出し個別的に検討された。蒲原論文は蘭学塾の学統系譜と実態を再構築し、さらに明治初期の県内洋学の系譜を検討された。しかし蘭学の受容はあっても展開してゆく場がなかったのが実情という。田崎論文は『医師人名簿』の翻刻と解題である。明治前期における地域医界の公的な位置は、質量共に洋方系医家や旧藩医層が占めていたことを実証された。平野論文は蘭方医吉田長淑の門人鳥海松亭の研究である。庄内藩医を継がず、学芸・書画の世界に遊ぶ反面、蘭学研究によって万国共通の原理に立つ『音韻啓蒙』を著訳した人物である。仙台藩眼科医大森家との血縁関係を明示し、大森家関係の新史料四点を紹介された。

それぞれの地域に応じた展開が繰り広げられ、在村蘭学の総合的研究に資する所大なるものがある。地域の立地条件、歴史的特性をはじめ、蘭学を支えた私的・公的な社会的条件、経済的条件はさまざまであるため、必ずしも蘭学の均一な普及と適切な浸透がみられるとは限らない。実情を正確に把握・分析し得る史料の発掘・調査が全国的に進んだ暁には、蘭学学統系譜の縦横関係と学際的交流の複雑な構図を視覚化・図式化することが要求される。これは本書の課題を越えたものであり、評者も含めた今後の課題である。

（吉田　厚子）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、一九九二年、A五判、三二五頁、定価五九七四円〕

宮澤正順著『素　問・霊　枢』

師匠から「批判しなければ書評ではない、批判しないなら書くなよ」と釘を刺された。本書はすこぶる示唆的で、かつ発明が多いが、あえて特徴と問題点それぞれ二点を挙げて評としたい。

昨年十一月の神農祭の懇親会で、早稲田大学の楠山教授は次のような話をされた。「中国哲学では、『素問』『霊枢』などの医書をあつかうのは異端視されていたが、最近は中国哲学を理解するには医書は欠かせないという風潮になっている。これから積極的に医書を読んでいこうと思う」。臨床家が医学古典を読むには限界がある。いや、あった。思想だけでなく、書誌・文字・訓詁・音韻など、どうしても専門的な知識が必要となる。針灸のさまざまな集まりで、中国学の専門家の話

しをうかがう機会を、幾度となく設けているのは、まさにその裏返しなのである。積極的な眼差しが医書に向けられようとしていると聴いて、心の中で小躍りした。その具現が本書であるとみれば、大きな流れを感じずにはいられない。このことを本書の特徴の第一にあげたい。

本書の第二の特徴は、筆者あとがきに「道家思想・神仙思想・道教との関係に重点を置いた」とあるように、道教の目で、『素問』『霊枢』に取り組んだということである。単に、中国思想の専門家、大学の先生が『素問』『霊枢』に取り組んだ、それだけではない。今までになかった切り口からの解説および注釈が、本書の大きな特徴である。この試みは同学のものを啓発するとともに、示唆的でもある。臨床の目だけで古典を読むだけではなく、あらゆる角度からアプローチすべきことを本書は暗に示している。思想的な背景を無視して、医書であるからといって視野を狭め臨床の側面だけで読むことは、戒めなければならない。これが特徴の第二である。

中国伝統医学はしばしば「気」ということばを用いる。これが、どれだけ初学者の障害になっているか。たとえば、九針十二原篇の補瀉の段。原文には「邪気」「気」「其気」「中気」と気のつく語が四見するが、本書の現代語訳には「邪気」「真気」「邪気」「血気」「邪気」「気」「経気」「正気」「正気」と九見し、増えている。この「気」の不統一は著者だけの問題ではない。中国伝統医学の内でも久しく論議されてきたことで、今もって明解は得られていない。「経気」「正気」「真気」がどういう風に違うのかを明確にする必要があろう。これが問題の第一である。

雑誌『経絡治療』に登載された丸山昌朗氏の「九針十二原講」、『日本経絡学会誌』の島田隆司氏の「九針十二原の研究」、同じく井上雅文氏の「九針十二原・補瀉条文の検討」などが参考文献に加えられていないことは、まことに残念である。アカデミーからみれば、こうした研究は埋もれて見つけにくいことが大きな原因だろう。アカデミーと臨床家でありながら研究している者との密接な交流、もしくは交流の場の確保、このことは急務ではないだろうか。これが問題の第二である。

本書が医学古典の研究に一石を投じたことを強調するあまり、具体的な内容についてあまり触れることができなかった。誤字が散見するが、道教からの解説・注釈、およびその博引傍証のさまを、是非一読されたい。

（宮川　浩也）

〔明徳出版、新宿区新小川町八―二六、電話三二六六―〇四〇一、一九九四年、四六判、二二〇頁、定価二七〇〇円〕

新藤恵久著『木床義歯の文化史
―世界に先駆けた日本の職人摯―』

木床義歯は歯科医学史に興味をもつものは一度はふれてみたいテーマである。

日本の文化でも科学でも、大抵はそのモデルやルーツは外国にあって、それが取込まれて実を結んでいるという中で、